

Title	自然と倫理：環境倫理と老子の道德
Sub Title	Nature and ethics
Author	沢田, 允茂(Sawada, Nobusige)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1997
Jtitle	哲學 No.102 (1997. 12) ,p.1- 13
JaLC DOI	
Abstract	My starting point, in this essay, is the differences between European meaning of the word 'moral' or 'Ethics' and that of the ancient Chinese, especially Lao-tsuean meaning of the corresponding words. I tried to explain the meaning of the conception of Dotoku (moral) and Shizen (nature) and tried to interpret these old Chinese meaning of the words in the context of contemporary way of thinking. In the 'TE Ching' (徳経) of Lao-Tsue he divided four different levels of the word 'morality' (徳) - that is 'levels of mastering the way of Tao (道)' - from the best to the worst ones. The best one is not knowing and not telling that the best one is such and such. The man who has mastered the Tao does not think that he is right nor telling people anything. He keeps himself silent. The theory of the contemporary so-called 'Situation Ethics' will be, in my opinion, interpreted as a modern version of Lao-Tsue's moral thinking. The Chinese conception of '自然' (nature) comes from 'what does behave like myself'. It includes human beings and other things that behave by themselves. These new interpretations of morality and nature will open a new vista in the coming theoretical systematization of ecological ethics.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000102-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

自然と倫理

——環境倫理と老子の道德——

—— 沢 田 允 茂* ——

Nature and Ethics

Nobusige Sawada

My starting point, in this essay, is the differences between European meaning of the word 'moral' or Ethics' and that of the ancient Chinese, especially Lao-tsuean meaning of the corresponding words.

I tried to explain the meaning of the conception of Dōtoku (moral) and Shizen (nature) and tried to interpret these old Chinese meaning of the words in the context of contemporary way of thinking. In the 'TE Ching' (徳経) of Lao-Tsue he divided four different levels of the word 'morality' (徳) —that is 'levels of mastering the way of Tao (道)' — from the best to the worst ones. The best one is not knowing and not telling that the best one is such and such. The man who has mastered the Tao does not think that he is right nor telling people anything. He keeps himself silent. The theory of the contemporary so-called 'Situation Ethics' will be, in my opinion, interpreted as a modern version of Lao-Tuse's moral thinking.

The Chinese conception of '自然' (nature) comes from 'what does behave like myself'. It includes human beings and other things that behave by themselves. These new interpretations of morality and nature will open a new vista in the coming theoretical systematization of ecological ethics.

* 慶應義塾大学名誉教授 (哲学)

一般的にいつて、倫理とか道德というものは、人間と人間との間の行為（言語行為もふくんで）に関する問題である、と考えられてきた。しかし環境破壊が問題となり、それを防止するために環境倫理 environmental ethics ということが云われ始めた。ここでの問題は人と人との間の行為の善悪ではなくて、人間の自然にたいする行為の善悪が中心的な問題となってくる。倫理は人間の間の行為の問題から、人間と環境的自然との間の行為の問題に移動することによって、人間の間の行為の問題にも従来には考えられなかった新しい方向を、いいかえれば倫理とか道德ということそのものに新しい方向を示唆しているように思われる。

この新しい方向の内容を明かにするために、まず^{モラル}道德とか^{エシックス}倫理という語の意味を、しかも西欧の諸言語における意味と、道德という語が現に用いられているその基となっている「老子」の考え方について述べてみたい。

現在のヨーロッパ諸国の言語で共通に用いられているエシックスとかモラルという語の語源は、前者はギリシャ語の *ēthos*（エトス）、即ち習慣を意味する言葉である。また後者はラテン語の *mos*（モス）、同じく習慣を意味する語から由来している。したがって^{エシックス}倫理も^{モラル}道德も社会的な習慣、習俗を意味している。私たちが始めて出合ったある社会の倫理や道德はどういうものかを知ろうとすれば、それはその社会の習俗を知ることと一致するだろう。これが倫理とか道德の第一の基本的な意味であり、それはレヴィ・ブルージュの云う習俗学 *la science des mœurs* の研究対象となるものである。その意味で道德は一つの社会的事実である。

しかし社会というものは歴史的に変化する。従ってある状況の下では、それまで習慣になっていた社会的な行動が、変化した新しい社会の習慣には適応しなくなり、新しい別の習慣は何かを探求し、それを新しい習慣にしようとする努力が生ずる。このような立場から見るとき倫理とか道德は従来までの習慣になっている行動ではなくて、それとは別の、未だ習慣と

なっていない新しい行動を習慣になるように、くり返し行動すべきだ、という内面的な努力または義務として、哲学の用語では当為としての意味をもってくる。この場合には倫理や道徳は社会的事実としてでなくて人間の心の中の心理的な態度として私たちを強制するという意味をもつようになる。かくして倫理道徳はこのような異なった二つの意味をもつものとして私たちの心の中に現象することになる。即ち習慣（習俗）の事実としてか又は心の義務として、別の言葉でいえば……であるものとしてか又は……すべきものとして、夫々別の現れ方をするのである。

このギリシャ、ラテン語系の意味とは異って日本や中国で用いている道徳（倫理という日本語はエシックスの翻訳語である）という語は、老子の著書の「道篇」と「徳篇」の二つの語から来ており、道篇は老子の形而上学の原理としての道 Tao の説明部分であり、徳篇はこの道^{タオ}をどれほど完全に個々人の行為の原則として身につける（得が発音の上で徳と同じであることから得に代って徳として用いられるようになった）仕方について述べた部分である。そして老子の説によれば、道を最も良く身につけた上徳の状態は、西欧の、特に基督教の影響の下での道徳の理想的な実現とは著しく異なる。基督教の下での道徳の理想的な実現形態は、モーゼの十戒を完全に守り、それが努力しなくとも自然に行われる（習慣）状態を意味するであろう。しかし老子の立場からすると、道を最もよく身に体得していることを上徳といい「上徳は徳とせず、是を以て徳有り……上徳は無為にして以て為す無し」、道を十分に身につけていない状態は下徳といわれ「下徳は徳を失わざらんとす、是を以て徳無し、下徳は之を爲して以て爲す有り」といわれる。上徳、即ちほんとうに道^{タオ}の在り方を知り身につけている人は、自分が道を身につけていると思ったり云ったりせず、また道を身につけているとはどういうことか、何を為すべきかなどということは一切云わない人である。これに対して道をほんとうに身につけていない下徳の人びとは、道を身につけるというのは仁を行うこと、即ち他人

を愛し同情することだ、という。また他の人はそれは義、即ち人の行うべき正しいことを行うことだと云う。また他の人は徳とは人々の習慣や作法をまもること即ち礼だ、という。しかし他人に同情することが場合によっては自然、即ち道に反することもあるし、義を行うと相手も義を行わなければ相手を非難し争いにもなる。また礼を守ることだ、という人は同じ礼を守らない人を退け、これも争いや戦いの原因となることになるからほんとうの徳、即ち上徳ではない。上徳とはこれを為すべきだ、とかあれを為すべきではない、などと口に出して徳を教えることをしないで、しかしその時々状況に応じて正しいことを行う人なのである。従って上徳はエートスやモス、即ち習慣でもないし、また人為的に「……を為すべきだ」と自分や他人に、言葉で定められた徳目を強制することでもない。即ち老莊の思想では道徳とはギリシャ、ローマでの語源から出発した西欧の^{モラル}道徳や^{エシックス}倫理の考えとは全く異なった考え方のもとで語られていることは明かである。

自然という語も中国語の語源は、ギリシャ語のノモス（人為）と対立したプュシス（自然）とは全く異なった意味をもっている。「自」とは元来^鼻→^自という象形文字から来たもので、自分の鼻を指して「自分」という意味で使われた。この「自分」と同じように他のすべてのものも「自分で動く」ものであり、それを他人からみれば「ひとりでに」あるいは、「おのずから」動くものである。「然」は、「……のように」という^{サフィックス}接尾語であり、従って自然とは「自分と同じように」というのが元来の意味であり、ひとりでに、自然に、^{オノズカラ}自から働くことである。それはギリシャ的な自然、即ち物理的実在の在り方をモデルにしたものではなくて人間個人の在り方をモデルにしたものである。したがって外部から何かをされて動くのではなくて「無爲」にひとりでに生ずるのだから「無爲自然」ということになる。

老子の徳篇の第五十七章では

世の中に禁令が多く布かれると人民はいよいよ貧しくなり、人民に文明の利器が普及すると国家はいよいよ昏乱する。人民に技巧が発達すると奇をてらった品物がどしどし作られ、法令が整備されればされるほど盗賊は増えてくる

というような政治の在り方にたいして、聖人が国を治めるとするならば、わたしが無爲であれば人民は^{オノ}自ずから教化され、わたしが清静を好めば人民は^{オノ}自ずから正しくなり、わたしが無事にしていれば人民は^{オノ}自ずから裕かになり、わたしが無欲であれば人民は^{オノ}自ずから純朴になる
(福永光司訳)

という言葉がある。ここからも分かるように「^{オノ}自から」という自然は、人間の政治的、社会的な行動の一つの理想的なパターンを意味しており、これを人間だけでなく天や地や、そして最後にこれらすべてが従っている道そのものにまで拡大して「道は自然に^{のっと}法る」といわれる(老子25章)。即ち「人は地に法り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に法る」(同所)のである。この老子の文を見ても分かるように、西欧の文化のなかで云われている nature にあたる語は、老子では天地であり、天地という語と自然という語は同義語ではない。自然とはどこまでも「私のように自分でひとりでに」(即ち他からの有為のない無為の)生起することである。そのことが私だけでなく、天地すべてのものにもあてはまる。それが道である、と老子は主張したのである。天地の(西欧のことばでの nature)の在り方、生起の仕方が自然に生じるのである。したがって古代中国の、特に老子の思想では「自然」は「nature」というよりも「automaton」と訳すべきである。それは「無為自然」という表現からも分かるように、むしろ「無為」という語のもつ意味をその裏の面から見て云う、という違いはあっても、その意味するところのものは無為と同一のものと云うことができる。そしてこのような無為自然を身につけることが道を身につける(得る)ことであり、道徳なのである。

このようにして東洋古代の老子の思想のなかでは、道德は人間が神および隣人にたいする教えられた行為を習慣になるように完全に行うこと、そして完全に行われないと感じたとき、常にそう行う「べきだ」と心を叱咤する、といった西欧的な在り方を意味しているのではない。無為自然の道德は、言葉で云われるような一定の徳目をどのような場合にも実行することが出来たり、またそうするように努力することではない。それは人間の言葉によって定められた行為を「そのようにしよう」と、即ち有為に努力し、その結果習慣となれば無意識のうちにその一定の行為を実行することではない。それは人間が「あれをしよう、これをすべきだ」と言葉で予め考えて行動するのでもなく（稀言）、自分から進んで何をしようと定めてかかって行動するのでもない。自分の発想では何もしないで（無為）、しかしそのときどきの状況をよく洞察することによってひとりで、状況が示唆するところのこと（自然）に従って行動することだ、と云うことができる。真の道德、即ち道のあり方を身につけるということは、ただ無為に何もしないで行動から逃避することではなくて、無為自然、即ち自分で定めては何もしないで、自然に、即ち状況がひとりでに斯くあれと示唆することに従って、それを断呼として実行することであろう。それはその都度の状況を深く洞察して、その状況に適した行動をすることである。さきに述べた老子の第57章でのことは、即ち「わたしが無為であれば人民は自^{オノズ}から教化され……」ということの意味は、治者が自分の欲するように治めようとする^{オノズ}と却って国が乱れてしまう。だから聖人たる治者は、自分の考えを基にしてではなくて、無為のうちに見えてくる民の状況を洞察して治めるならば、民はひとりでに、自分から正しく行動して国がうまく治まる、ということの意味していると云うことができる。

老子の云うような「自然に従って行動する」という無為自然は、環境倫理を主張する人たちの云う「自^{ネイチュア}然に従って行動する」ということとは大きな違いがあることが明かになる。後者の「自^{ネイチュア}然にしたがう」を老子の

用語で云えば「天地にしたがう」ということになる。そして天地 (nature) は更に道に従い、そして道とは自然に従うものである。これを逆に辿れば道も天地も人もすべて自然に^{ノット}法る。即ち従うことになる。このような意味のふくみから老子以降、自然という語は「天地自然」といった表現を通じて西欧の nature と同じような意味をふくむようになってくる。しかし古代の中国での最初の意味は、どこまでも人間の行為の内面的な在り方を表現するものだったのである。「道德」という語はこのような無為自然の行為の境地を求めることであった。

今世紀の後半あたりになって環境破壊が進み、それに応じて環境倫理ということが云われるようになった。そしてかつての人間の自然に対する行動の基準が「自然の克服」から、「自然を愛する」とか「自然に従う」とか「自然から学ぶ」、「自然との共存または共生」といった言葉で、この新しい、自然にたいする道徳的行為の基本的な姿勢が云われるようになった。しかしこのような表現は私たちの自然にたいする態度の基本的な心理状態を、単に抽象的に、あるいは原則的に表現するにとどまっていて、現実の個々の具体的な状況で私たちが実際に行なっている行為と必ずしも一致しないばかりでなく、具体的な状況の下で実際に如何に行動すべきかを決定する助けにはなっていない。具体的な状況のもとで「自然を愛する」とか「自然に従う」とはどういう行動をとるべきかを決定してくれることにはならない。

例えば「自然を愛する」というとき、その自然とは具体的に何を意味するのかは明確でない。自然といわれるものは物理的自然、天空や水や大地だけではない。それらの中で生きている生物のバクテリア、菌類、キノコ類、植物、動物、別な言葉でいえば^{モネラ}原核生物、^{プロティスタ}原生動物、^{フンギ}真核菌類、^{プランタエ}植物、^{アニマリス}動物として5つの生物界に属するすべての生物個体もまた自然にふくまれねばならない。森林がどんどんと伐採され、その結果として気候の変化や洪水が起るのは環境破壊である。しかし環境のなかには物質的

自然だけでなく、その中で生きている生物のすべてがふくまれねばならない。私たちの環境の中では物質と生物とは相互にからみ合っていて、それらを分けて考えることはできない。

また「自然を愛する」といっても、私たちは動物の一員として、自然の一部であるある種の植物や動物を食用として喰べているし、ある種の細菌や動物を人体に害あるものとしてその生命を絶つことを当然のこととして認めている。「自然を大切にしておいてそのままに残すべきだ」といって新しい開発を見合わせる一方で、鶏を人工孵化し養鶏所の箱の中に閉じ込めて卵だけを収穫するために生かしておく、という自然の在り方を破壊しても誰も批判しないで当然のこととして認めている。犬や猫のような生物を大切にしていながら蚊や蠅のような生物は平気でたたき殺す。例をあげればきりはない。これは「人を殺してはならないと云いながら、戦争となれば出来るだけ多くの敵の人間を殺すことが愛国と勇敢さの名の下でむしろ美德とされることと同じ態度である。

元来、西欧の nature という語は、あるものの存在が人間（人為）によるもの——例えば机とか椅子や家屋——と自然によるもの、即ち人間とは無関係に存在するもの——例えば天地、水、動物、植物など——とを区別するために用いられたが、同時に *tò áei phóor*（常に自から生じるもの、あるいは閉じて覆れ、たたみ込まれているものから現れ出るもの）という本来の語の意味からすれば、人間自身もそのような nature の一部分であるとも考えられる。蜂が巣を作り、蜘蛛が網を張るのが自然の出来事ならば、人が家を作り車を作り飛行機を作るのも自然の出来事だとも云えなくはない。また人間が土地を耕して稲を育てる稲そのものは自然物なのか人工物なのか、と考えればどちらとも云えて明確ではなくなる。このように西欧での nature は nature と呼ばれる事物の範囲が曖昧であり特定し難い。したがって環境倫理といっても、物理的自然だけが環境のなかにはいるのではなくて、人間自身も、あるいは動物や植物その他の生物も環境の

中にはいる場合も考えられる。

このように考えてみると、自然に対して（環境に対して）どうふるまうべきか、という道德の新しい展開に際しても、ただ自然に対してとか環境に対して、というだけでは余りにも漠然としていて、どういう状況の中でのどのような自然と呼ばれるものに対しての行動か、具体的にその場その場の状況の指定が為されなければ、私たちの行動を決定することはできない。そしてこのような状況を確実に知るためには、私たちは物理的自然の動きの正確な（法則的な）知識に加えて、すべての生物（動物、植物は云うまでもなく原生動物、原核生物、真核菌類に至る）の生態にかんする正確な知識を持たねばならない。しかしこの知識に関しては、私たちは殆んど未開拓の状態にあるといってもいいだろう。したがって厳密に、そして良心的に云うならば、私たちは自然に対してどう振舞うべきかについては、ごく単純なばあいを除いては、まだどう行動すべきかについて何も云うことは出来ない状態にあるというべきだろう。老子の表現にしたがって云うならば、無為自然に考え行動することについては、「……すべきだ」といった断言を控えて、そのときになってみなければ「何もいうことは出来ない」という上徳の状態に私たちは置かれているのである。そして老子でなくて現在の思想のパターンで云うならば、これは状況倫理 situation ethics と呼ばれている立場に対応すると云えるだろう。

状況倫理とは、何事もその善悪が（あるいは為すべきことと為すべきでないことが）いわば先天的に定まっているのではなくて、むしろそのときどきの状況の中で、状況の要求に合わせて個別的に決定すべきである。と主張する。従って一般的に何が善で何が悪であるかという形で問われるならば、分からないとか、何ともいえないという風に（老子のように）云う以外にはないだろう。しかしこのことは判断をさし控えるとか、時々気まぐれで決定する、ということではなくて、逆に問題をとりまくすべての状況を適確に正確に捕把し決断する、ということである。云い伝えられた

言葉だけの徳目に合わせる、という安易な態度ではなくて、その都度に異なる状況についての知識にもとづいて、より新しく、より慎重に、より広く深く考えて決定することを要求するものである。

もし宇宙のなかに存在するすべてのもの——天地や石や水、そして植物、動物などのすべて——を nature と呼ぶならば、それは人間をもふくんだ複雑系 complex system と考えねばならない。人間の言語はこの複雑系を知る一つ的手段ではあるが、しかし極めて不完全な手段といわねばならない。一つの云い方、一つの物語、一つの解釈が把握するのは複雑な系の単なる一つの側面でしかない。それは絶えず全体との無数の関連のなかで変化しつづけているものを分離し、固定すること——別言すれば概念化すること——で、それなりの有効な働きをしているということができる。しかしこの変化しつづけるもののその時々を一つの文、一つの物語、一つの解釈で捕えることはできない。あらゆる他の関連のもとで絶えず変化しているものは、その見方によって多くの異なった言葉で捕えることが可能である。再び老子の考えで云うならば、生滅変化のなかで働きながら生滅変化を超越して永遠無限に存在する「道」は^{ロゴス}言葉では捕えられないものであるが、しかしこれを実際には（彼の著書の中では）、ある時には詩的な言葉で、ある時には象徴的、譬喩的な言葉で、またある時には逆説的な云い方で何とかして捕えようとしているのである。現代の理論の用語でいえば「道」とは光に照らされ、明哲な^{ロゴス}で捕えられる秩序あるコスモスではなくて、その背後にあって、それらを生じさせる混沌たるもの、即ちカオスだ、というべきである、したがってこれを^{ロゴス}言で捕えようとすれば安易な言葉に頼ることはできないのである。このことを老子は道は言葉では捕えられないもの、何も云わないでも捕えられるもの、と表現したのである。

人間が自然に対して行う行為のどれが正しくてどれが悪きものであるかを定めるためには、人間がどの時点で何に対して、どのように行動し、

その結果この複雑な自然の何処にどのような影響を及ぼし、また他の何処に別のどのような変化を及ぼすか、を知った上で何のために行動するのか、しないのか、を定めなければならない。しかしこのことを確実に知るためには私たちは余りにも無知な状態にあると云わねばならない、私たちが「自然に従った」行動をすべきだ、とか、「自然を愛し、大切にする」行動をすべきだ、と云っても、その行動が正しくはどういうものであるかを知り、決定するためには、私たちは単純に「これが自然に従うことだ」とか、これが自然を大切にする「ことだ」とか「保護することだ」などと云うことが出来ない場合がまだまだ多くあることを改めて考えねばならないだろう。

云うまでもなく、自然に対する人間の行為の善悪の判定が比較的単純に、しかも普遍的な承認の下に行われるような、その意味で異口同音^{イクドウオン}に一つの文で云われるような場合が多くあることは勿論である。これに対してどのような行為が自然に反するのか反しないのかを決定することが明確には定まらないで、ある見方からすれば反している、と云えても別の見方から見れば自然に反するとは云えないような曖昧な事例も存在する。

前者の代表的な例は

- ・自動車の排気ガスを少なくすること
- ・フロンガスを使用しないようにすること
- ・森林の伐採を規制すること etc....

後者の例は

- ・男女の生み方を人工的に操作すること
- ・臓器移植を促進すること（特に大脳の移植を行うこと）
- ・クローン人間を造ること etc....

このように道徳的行為は状況によってその善悪が定められるべきだ、という考え方は、いわゆる状況倫理 Situation Ethics と呼ばれている考え方と一致する。Dietrich Bonhoeffer がキリスト教の牧師でありながら、

ヒットラーという一人の人間を殺すことに同意し、暗殺団の一味に加わった、という行為を正しい行為と考える人々の倫理観はその一つの例と云うことができる。そしてこのような考え方は単に倫理道徳の領域における新しい視野の開拓にとどまらず、人間の知識——認識論——一般への新しい問題提起でもあると私は考えている。というのは社会生活の範囲が広がる方向に進んできた人間の文化のなかで、人間の認識はある意味で現実の諸々の状^{シチュエーション}況を軽視して専ら言語的な表現のみを重要視するようになってきているからである。まず最初に印刷技術の開発により、新聞、書物、パンフレットなどによる知識、情報の獲得の分野が大きく拡大された。ついでラジオ、テレビジョンなどの発明によって——テレビジョンによる映像情報の附加伝達は可能になったにせよ——、私たちの知識や情報の獲得は、一つの出来事をとりかこんでいる諸々の多くの状況の知識を脱落させて、僅かな言語表現だけで伝達される知識が増加していく傾向にある。

原則的には同居している家族のメンバーはお互いの生活行動全体の状況を、直接の体験を通じてよく知り合っている。しかし生活を共にする機会の少ない他人になればなるほど、お互いの行動が置かれている諸状況の知識は希薄になっていく、そしてある特定の出来事だけが全人類に理解されるように作られた言葉を通じて伝達されるようになり、諸状況の知識は生活の距離の大きさに反比例して少なくなっていく。従って遠くの人ほどその特定の行動の背後にある状況は知られることが少なくなり、特定の行動の言語的表現だけを対象として価値判断が為されるのはやむを得ないことであろう。しかし人間の情報獲得の手段は科学技術の発展により、次第に拡大し、マルチメディアによる情報の伝達も実現しつつある。これらの新しい情報伝達が、お互いの状況についての知識の増大につながるよう利用され、それによって人間同士の判断が状況にもとづいた正しいものになっていくことが望まれる。そのことは人類の社会、政治の形態の将来の在り方の決定にもつながっていくと思われる。

このような道徳と知識との関係はデカルトの完全なる道徳 *la morale parfaite* と同じ考え方につながっていく。

以上のような環境倫理（倫理学そのものに対しても）についての私の考え方は、デカルトの云う「完全なるモラル」*La morale parfaite* の考え方と同じタイプだとも云える。デカルトの云う「完全なる道徳」は彼の云う学問の樹（その根は形而上学、幹は物理学^{フィジックス}、その枝は医学^{メディシン}、機械学^{メカニクス}を始めとする諸科学であるが）その最上の枝が「完全なる道徳学」なのである。この完全なる道徳が実現されるのは諸科学が完全なものになったときであるが、そうなる為には長い（恐らく無限の）時間が必要である。そのような状態に到る長い間にモラル無しでは済ますことは出来ない。そこでその間は彼の云う「假りの道徳」*la morale provisoire* が必要である。ということは私達は現在の「假りの道徳」に満足せず、絶えず新しい科学的学問の知識を土台として、デカルトの考える道徳の究極の目的である幸福な生活 *La vita beata* 実現のために我々が為さねばならない道徳をつくりつづけねばならないのである。これは倫理学上の幸福説 *eudaemonism* にあたるのであるが、環境倫理あるいはエコエシックスの目的は人間という種の保存である以上、それは人^{ホモ・サピエンス}類の幸福なる生活の大前提としての、あるいはその基盤としての種の保存を当然のこととして幸福になるための前提として考えている筈である。

環境倫理は昔から在る幸福説の現代的な新しい側面であることを改めて位置づけることが必要であろう。そしてその原則は状況倫理と一致すると云うことが出来る。